

月刊アートコレクターズ 「展覧会レポート」 2019 より

幾本もの線が外側から内側に向かって一筆で描かれる。

色鉛筆で描くとペン先が摩滅し、細い線から太い線に変化する。

筆ならばインクがだんだん薄れるし、銀筆、金筆で描くと、紙が削れへこんだ手元が揺れたりする様も線に現れる。

驚くべき忍耐を必要とする反復作業により、自然発生的に現れた造形が面白い。

鉛筆や筆、キャンバスが作品を描くための道具ではなく、目的となっている。

手段が目的となったときに、予期せずうまれるものを作家は実験しているし、その結果を楽しんでいるようだ。

例えば家電製品の使い方を誤った時に起こる予期せぬ事態。

作品の場合、そこまで危険ではなく被害もないが、そのようなドキドキがあるのかもしれない。

いずれにせよ作家の執念やこだわりには驚嘆すべきものがある。

「素材と道具のためのドローイング」を長年追及している。つまり、手段と目的を反転させる試みである。作品は、削って尖らせた色鉛筆や金属筆の最初が細く、徐々に太くなる線を、あるいはインクを含んだ筆の最初は太く徐々に細くなりながらかすれていく線、そうした線の集積で作品を成立させる。色鉛筆の選択もサイコロの目で決める。極力作家の意思の介入を距絶する。忍耐強い作業である。細部の様子は天眼鏡でのぞくしかないが、無作為で引かれた線の集積は、恩いもつかぬほど美しく、なぜかもの哀しく、琴線をふるわせてくる。近年、海外での評価も高まっている、という。